

鴟と梟について

——その混同と受容——

谷口 慎次

〔抄録〕

これまで『孝子伝』三五伯奇条では、伯奇が変化した鳥として曹植「令禽惡鳥論」などにおいて「伯勞」つまり「鴟」（モズ）であるとされてきた。しかし『陽明本孝子伝』では鴟梟（しきようウ）となっており、この異なりが一つの問題とされてきた。

だが、山田純は「鴟鵂」という名の天皇」において『芸文類聚』などの漢籍を用いて実際は異なる種々の鳥名が同名の異鳥として交換されていることを示した。この山田の論に基づいて「鴟」と「梟」を調べたとき、両者が交換可能であることが明らかになり、このことは『陽明本孝子伝』を考察する際に大きな意

味を持っていた。

本論ではこれらの問題を起点として、「鴟」と「梟」の混同について唐代から宋代を経て清代まで時間を追って調査を行った。そこで明らかになったことは、唐代から起っていた「鴟」と「梟」の混同が清代に至るまで続いていたこと、そしてその根拠が「食母」という習慣に基づいていたことであつた。

キーワード 鴟モズ（伯勞フクロウ）、梟、孝子伝、伯奇、食母

一 問題の在処

昨年度（二〇〇八年度）、佛教大学大学院にて黒田彰教授の演習を受講した際、黒田氏から最初の授業において、山田純「鴟鵂」という名の天皇」を参考にしながら、これまで『孝子伝』研究において問

題になっていた個所についての再考を行おうと提案された。

山田の「鴟鵂」という名の天皇」ではどのようなことが論じられていたのか。そのいくつかのポイントについてまとめておく。

まず山田が着目したのは『日本書紀』仁徳紀における具体的鳥名の頻出であり、加えて、『古事記』と比較した場合に漢語を志向してい

る点である。具体的には『日本書紀』仁徳紀の「大鵲鵲」「隼別」「百舌鳥」といった表記を取り上げて、仁徳紀だけが「鵲鵲」と「木菟」の名を交換していることに着目し、ここに漢語による鳥名表記の問題との深い関係をみている。こうした点に対して山田は漢籍の類書を利用することによってそれぞれの鳥名表記の問題を考察し、仁徳紀の鳥名表記の意味を説明しようとしている。

具体的な内容は論文に譲るが、重要なことは山田が『芸文類聚』『文選』『漢書』をはじめとする種々の漢籍を用いて、「本来異なつた姿形の鳥」、特に「鵲鵲」(ミソサザイ)「隼」(ハヤブサ)「百舌鳥」(モズ)「木菟」(ミミズク)の四種の鳥に「陰陽五行の変化を通して結びつくという関係性」を確認し、「同名の異鳥と解釈するのを可能にしている」いうことを示している点にある。加えて山田は、これらの鳥が、姿形が異なるにもかかわらず全く同じ鳥として認識されており、季節により鳥がその性質を変化させるという「陰陽五行の変化の論理」によって「鳥名解釈の多数性が引き起こされている」ことを指摘している。

この山田の指摘はどのような意義を持つているのか。それは黒田氏による『孝子伝』の研究においても同じような鳥の同一視とみられる問題が存在していたためである。

『陽明本孝子伝』三五伯奇には次のような記述がある。

父の曰く、是れ伯奇ならば、^{まさ}当に吾が車に上り、吾に随いて還るべきなりと。鳥即ち車に上り、随いて家に還り到る。母便ち出で迎えて曰く、向に君が車を見るに、上に惡鳥有り。何ぞこれを射

殺さざると。(中略)鳥即ち後母の頭に飛び上り、その目を啄む。今の世の鵲梟^{いさよう}これなり。一名は鵲鵲。その生める児、還りて母を食らう。

(父之曰、是伯奇者、当上吾車、随吾還也。鳥即上車、随還到家。母便出迎曰、向見君車、上有惡鳥。何不射殺之。へ中略)鳥即飛上後母頭啄其目。今鵲梟是也。一名鵲鵲。其生兒還食母)

これは、伯奇の父、伊吉甫が後妻の讒言で伯奇を追ひ出したことを後悔し、川まで彼を追いかけていく。すると伊吉甫は伯奇が化した鳥と出会い、彼はその鳥を家に連れて帰る。家に着くと後妻からその鳥を射殺するように言われ、伊吉甫は逆にその後妻を射殺する、という箇所⁽¹⁾に当たる。

ここで最も重要なことは、黒田氏が「伯奇贅語―孝子伝図と孝子伝―」ですでに指摘されているように、種々の類書に引かれた曹植「令禽惡鳥論」などにおいては伯奇が化した鳥は「伯勞」であり、「伯勞」とはつまり「鵲」(モズ)であるとされていることである。⁽²⁾対してこの『陽明本孝子伝』三五伯奇では伯奇が化した鳥は「鵲梟」(フクロウ)であると書かれているのである。

黒田氏は「伯奇贅語」において、ここに見られるような「伯勞」と「鵲梟」の混同ないしはその同一視について、興味深い資料として唐、⁽³⁾積遠年の『兼名苑』(『塵袋』三、『塵添壺囊鈔』八等所引)からの記事⁽⁴⁾を引いている。

兼名苑ニハ、服鳥^{フクテウ}、一名ハ伯趙^{ハクテウ}、一名ハ鵲^{ハク}、博勞也。其レ生シテ長大シテ、便チ反テ其ノ母ヲ食フ。一名ハ梟^{ハク}、不幸鳥ナリ。

尹吉甫^{キンキツフ}カ前^{サキ}ノ婦子^{メカコ}伯奇^{ハクキ}、後母ノ為讒^{ラレ}セ所^ヲテ、遂キニ、身ヲ津^{ナリ}（律）河ニ投^{ナゲ}。其ノ靈惡鳥ト為^ルヲ、今ノ伯勞鳥^{コノ}之ナリト云ヘリ。

（兼名苑、服鳥、一名伯趙、一名鷁、博勞也。其生長大、便反食其母。一名梟、不幸鳥。尹吉甫前婦子伯奇、為後母所讒、遂身投津へ律）河。其靈為惡鳥、今伯勞鳥之ト云ヘリ。）

黒田氏が指摘されたように、この逸文は「鵂」と「梟」の混同、ないしは同一視がすでに唐代から見られる貴重な資料である。

山田の論文と『孝子伝』伯奇条のこの問題に関しては、既に黒田氏が「鷁梟と伯勞―「鷁鷁」という名の天皇」読後^⑤」において、山田の説を評価し、先に示した「伯勞から鷁梟への転化に関する、かねてからの疑問」が「氷解した」と認めている。黒田氏は同じ論文で山田の鳥名解釈における問題点を指摘するとともに、山田の説を踏まえて伯勞と鷁梟の鳥名交替を考察することによって、陽明本伯奇条の三国時代曹植以前にさかのぼる可能性が示唆されたこと、そして漢代孝子伝が陽明本に類するものであることを、曹植「令禽惡鳥論」を踏まえながら再考しうる可能性があることにも言及をしている。

本論はこれらの問題から出発し、さらに後代の「鵂」（モズ）と「梟」（フクロウ）の混同や同一視の問題に焦点を当てたい。先に唐代の『兼名苑』を引いて、既に「鵂」「梟」両鳥の混同が見られることにふれたが、その後、唐代以降の中国では両鳥はどのように見られるようになったのか。その混同が続いたのか、それとも明確に区別されるようになったのか。その点について、次章より詳細に見ていきたい。（次章より敬称を略す。）

二 宋代資料に見る「鵂」と「梟」

先ず明代の『正字通』（明、張自烈編、清、廖文英補）の「鵂」の項を見ると、非常に興味深い記述に突き当たる。『正字通』亥集中・鳥部「鵂」の項の最初には「鵂、伯勞也」とあるが、その後に、

陳正敏遜齋閒覽二、鵂ヲ謂ヒテ梟ト為ス

（陳正敏遜齋閒覽、謂鵂為梟）

とあり、「鵂」と「梟」を同一視した書として『遜齋閒覽』の存在を示している。しかもさらに後には、

古今諺、鄭志道諭俗編ニ云ハク、伯勞母ヲ食フ、代代相成ス。此レ則チ遜齋ノ鵂ヲ謂ヒテ梟ト為スニ因ル。伯勞ノ冤ナルヤ

（古今諺鄭志道諭俗編云、伯勞食母、代代相成。此則因遜齋謂鵂為梟。伯勞冤哉。）

とあって、この『遜齋閒覽』を引いて、伯勞が母を食うという記述がなされている。

この二つの記述は何によったものなのか。『遜齋閒覽』は宋代、陳正敏撰による十四巻の書であつたが、すでに散逸してその逸文は『說郛』（明、陶宗義撰、百巻）に残るのみである。そこで『說郛』三二所引『遜齋閒覽』を見ると、

百勞^{モズ}、一名梟^{キヨウ}、一名鵂^{ゲキ}。

（百勞、一名梟、一名鵂。）

とあり、明らかに「鵂」と「梟」を同一視している。しかも、その後には、

其ノ母ヲ食フノ不孝ノ故ヲ以テ、古人梟羹ヲ賜フ。又其ノ首ヲ木ニ標ス。

（以其食母不孝故、古人賜梟羹。又標其首于木。）

等とある。特に「古人梟羹ヲ賜フ。又其ノ首ヲ木ニ標ス。」の記述は、『説文解字』の「梟」に対する「不幸鳥ナリ。故ニ日至リテ梟ヲ捕エコレヲ磔ス。」や、「漢儀。夏至百官ニ梟ノ羹ヲ賜ル」などの注と重なることから、明らかに「梟」に関わる説となつてゐることがわかる。また、この『遯斎閒覽』の記述に関しては『重較説郛』（明、陶宗義撰、明、陶珽重較、百二十卷）の卷二五にも同一の内容が所収されてゐる。

『説郛』に引かれてゐる『遯斎閒覽』百勞の項において、興味深いのが以下の記述である。

余嘗テ偶^{たま}北阿鎮ノ小寺ニ居リ、寺後ノ喬木數株アリ、其ノ上ニ梟巢有リ、凡^すベテ八子ヲ生ム、子大ニシテ能ク飛ブ、身皆母ト等シ。食ヲ求ムルコト益^{ますます}急ナリ。母ノ勢ヒ能ク供ニスルアタハズ。即チ荆棘ノ間ニ避伏ス。羣子噪ギ逐フコト已マズ。母必ズ逃グルアタハザルヲ知ル。乃チ身ヲ仰シ翅ヲ披^{ひら}キテ臥ス。衆子ノ啄ミムニ任ス。食フコト尽クルニ盡リ、乃チ散去ス。就キテ視レバ惟^た毛嘴^{もうし}ノ存スルノミ。

（余嘗偶居北阿へ門へ鎮小寺、寺後喬木數株、有梟巢其上、凡生八子、子大能飛、身皆與母等。求食益急。母勢不能供。即避伏荆棘間。羣子噪逐不已。母知必不能逃。乃仰身披翅而臥。任衆子啄。食至盡、乃散去。就視惟毛嘴存焉。）

この箇所で陳正敏は、百勞の生態として彼自身がこの鳥の子が母を食うところを見た、もしくはそういう生態を確認したと記述している。さらに興味深いのは子についてゆけなくなったことを悟つた母が、自らその体を子に差し出してゐると記述されてゐることである。

次に「古今諺鄭志道諭俗編」について考える。第一に、「古今諺」についてだが、単独の資料としては明代、楊慎撰の『古今諺』という書がある。これは短い書物であり、各地の古い諺を収録しているのだが、ここには「鵲」と「梟」を同じとするような記述は見られない。つまりここでの「古今諺」は書物の『古今諺』を指すのではなく、単に「古今」の「諺」を意味すると思へよう。

第二に「鄭志道諭俗編」であるが、この箇所は正確には鄭玉堂、彭仲剛による『琴堂諭俗編』（二卷、宋代成立（四庫全書所収））のことを指す。鄭玉堂は『琴堂諭俗編』二卷のうちの上巻、諭俗編を撰しており、その「孝父母」に次のような記述が見える。

楚諺ニ曰ク、伯勞母ヲ食ス、代代相承ス。

（楚諺曰、伯勞食母、代代相承。）

ここでは楚の諺に、伯勞が母を食うという習慣が代々受け継がれてゐる、と記述されてゐる。この箇所の記述から『正字通』の記述の出典が判明するだろう。『琴堂諭俗編』のこの箇所で「楚諺曰」となつてゐることを考えると、先の「古今諺」はこの「楚諺」を受けて述べられてゐると考えられる。

『正字通』を通してみられる宋代の資料は以上の『遯斎閒覽』、『琴堂諭俗編』の二種類となるが、その他の宋代の資料では『通志』（南

宋、鄭樵撰）にも短い記述が見られる。『通志』七六昆虫草木略二禽類の「梟」の項では、

梟、爾雅二曰ク、鴟（中略）説文ニ云ハク、梟母ヲ食フ。不孝之鳥ナリ。

（梟、爾雅曰、鴟へ中略）説文云、梟食母。不孝之鳥。）

などと書かれており、全体としては一般的な「梟」の解説と同じ内容である。だが、その最後に短く、

或説ニ、即チ今ノ伯勞也。母ヲ食フ。

（或説、即今伯勞也。食母。）

と書かれている。

ここで「或説」が何に因っているのかは全くの不明であるが、おそらく『遼齋閒覽』のような説を指すのであろう。重要なことは、『通志』のような歴代の諸事項をダイジェストした一般的な書物に、「梟」と「伯勞」とを同一視した説が記載されていることである。換言すると、宋代には「鴟・伯勞」と「梟」を同一と見なす考え方がかなり広まっていた可能性を示していると言えるだろう。

三 以降の資料に見る「鴟」と「梟」

『正字通』も明代の資料であるが、次に『正字通』以外の宋代以後の資料における「鴟」と「梟」についての記述を見ていこう。先ず明代の文献として、「鴟」と「梟」についての記述が見られるのは『本草綱目』（李時珍撰、五十二巻、明・万暦六年成立）である。『本草綱目』四九伯勞には『正字通』と同じく、

陳正敏遼齋閒覽、鴟ヲ謂ヒテ梟ト為ス。

（陳正敏遼齋閒覽、謂鴟為梟。）

の記述は見られるが、『正字通』とは異なり、「古今諺」や「鄭志道論俗編」に関する記述は記載されていない。

『本草綱目』四九で重要なのは次の記述である。

陳説ニ據レバ則チ其ノ目撃スルヲ謂ヘバ、断然トシテ以テ梟為リ。

而ルニ其ノ形ヲ具ヘザルニ似テ、陳蔵器ノ鴟即チ梟トスルノ説ニ合ハズ。

（據陳説則謂其目撃、断然以為梟矣。而不具其形似、與陳蔵器鴟即梟之説不合。）

ここで李時珍は『説郛』三二所引『遼齋閒覽』の話を引いてこそいないが、その記述が陳正敏の目撃談によることを評価し、その話題の鳥は「断然トシテ以テ梟為リ」と断定している。だが「而ルニ其ノ形ヲ具ヘザルニ似テ」と陳正敏の記述が具体的にないことを指摘して、この鳥を「梟」と考えるということは陳蔵器の説に合っていないという。陳蔵器は唐代、今の寧波の人であり、『本草拾遺』（唐・開元年間後期）の作者である。李時珍は『遼齋閒覽』の記述から考えると、おそらく陳正敏が見た鳥は梟であろうと考えているのだが、しかし、「鴟」を「梟」と考えることに關しては、特に疑問を呈していない。

明代、方以智撰の『通雅』（五十二巻）にもその巻四五に

陳正敏遼齋閒覽謂ハク、鴟ヲ梟ト為ス。

（陳正敏遼齋閒覽謂、鴟為梟。）

の記述があり、その後には、

古今諺鄭志道論俗編云ハク、伯勞母ヲ食フト。代代相成ス。此レ則チ遯齋ノ鵲ヲ謂ヒテ梟ト為スニ因ル。伯勞ノ冤ナルヤ。

(古今諺鄭志道論俗編云、伯勞食母。代代相成。此則曰遯齋謂鵲為梟。伯勞冤哉。)

の記述の両方が見られる。この記述は『正字通』の記述と全く同じである。

『通雅』と『正字通』のどちらの記述が先かという問題に関しては、先ず両者の成立時期を考える必要がある。『通雅』は刊行が清・康熙五年となつてゐるが、一般に明代の文献として記載されていることから成立はやはり明末であろう。『正字通』はさらに成立時期が不明確であり、明末清初というのが通説のようである。両者の成立時期はかなり似通つた時期であることから、次にその記述を確認すると、

『正字通』には、

通雅曰ク、鵲、別名伯鸛、伯勞、伯趙、姑惡苦吻鳥ナリ

(通雅曰、鵲、別名伯鸛、伯勞、伯趙、姑惡、苦吻鳥也。)

という記述や、

通雅、奥詩矛盾無キナリ。

(通雅、奥詩無矛盾也。)

という記述によつて『通雅』を参照している点が見られる。この点を考慮すると『正字通』の記述が『通雅』に因つてゐると考えるべきであらう。

宋代と明代の間となる元代の資料には特徴的な記述が見られる。その一つに『六書故』(戴侗撰、三十三卷通釋一卷、元・延祐元年成立)

がある。

『六書故』一九鵲の項には

説文ヲ按ズルニ、伯勞ヲ以テ梟ト為ス。梟下ニ詳具ス。

(按説文、以伯勞為梟。詳具梟下。)

とある。そこでおなじく卷一九梟の項を見ると

舅氏曰ク、梟、博勞ナリ

(舅氏曰、梟、博勞也。)

という記述や、

能ク自ラ食セバ則チ其母ヲ食フ。

(能自食則食其母。)

といった記述が見られる。またその後には次のような一節が続く。

梟ハ鵲ト一物ナリ。按ズルニ野人伯勞ト謂フ。眉ヲ画クニ似テ短

尾ナリ。或ハ博勞ト謂フ。他巢ノ卵ヲ探リ食ヒテ、其ノ中ニ卵ス。

他鳥知ラズシテ之ヲ字フ。比ヒ長ズレバ則チ其ノ已ヲ字フ者ヲ啖

フ。故ニ食母ノ名ヲ得。或ハ伯勞ト云フ。郭公ノ巢ニ卵ス。梟鏡

ハ、皆博勞ト名ヅクルヲ斥クヲ以テスレバ、殆ドコレ梟ナリ。

(梟鵲一物。按野人謂伯勞。似畫眉短尾。或謂博勞。探食他巢之

卵、而卵其中。他鳥不知而字之。比長則啖其字已者。故得食母

之名。或云伯勞。卵於郭公之巢。梟鏡皆以斥名博勞、殆是梟

也。)

『説文解字』を見ても、そこには「鵲」と「梟」を同一とする記述は一切無い。故にこの「説文ヲ按ズルニ、伯勞ヲ以テ梟ト為ス」の一文は多に疑問のある箇所である。さらに「梟」の項を見ると、解説

の中身は後述するが、少なくとも説文が「伯勞ヲ以テ梟ト為ス」とすることの解説は一切ない。この点はこの箇所の大きい問題として残る。

次に「梟」の項の解説を見るならば、興味深いのはその後の説明である。「他巢ノ卵ヲ探リ食ヒテ、其ノ中ニ卵ス。他鳥知ラズシテ之ヲ字フ。比ヒ長ズレバ則チ其ノ已ヲ字フ者ヲ啖フ。」この一節は明らかに郭公などが他の鳥の巢に卵を産む托卵のことを指している。現代的な見方ではカッコウがモズの巢に托卵を行うのであるが、ここで注意すべきことは、われわれが問題にしている事項が中国古典における鳥名の混同や同一視、もしくはその交換であるという点である。

山田の論文に戻ると、その鳥名交換の整理の中で既に「伯勞（＝賜）＝布穀」が確認されている。⁸⁾ここで示される「布穀」とは現在のフドリ（ツツドリ）ともモズともカッコウともホトトギスともされる鳥なのである。これまで見てきている「伯勞・博勞・賜」を現在言われる「モズ」と考えるのは一般的ではあるが、すでに鳥名交換が可能であることを確認している以上、「伯勞・博勞・賜」＝「モズ」という単純な一対一の結びつきだけを認めることはできない。「伯勞・博勞・賜」は「布穀」を通して「郭公」とも十分結びつき得るのである。つまり、一見「博勞」に托卵の習性を見ることは不自然に見えるが、托卵が「布穀」に類する鳥の一般的習性と考えられていたとするならば、必ずしも不自然な記述ではないのである。

実際、山田はその論文において『芸文類聚』九二鳥部下から「或云布穀生子、鵲鵲養之」を示しており、これは托卵のことであろうと考察しているし、黒田もまたこの箇所を受けて『本草綱目』四九から

「(時珍曰) 杜鵑……不能為巢、居他巢生子」を引いて『芸文類聚』九二の記述は托卵のことだろうとしている。つまり、「布穀」自体に既に托卵の習性があると考えられていた可能性はあり、このことを考えても、「賜」もまた托卵を行うと考えられていた可能性は非常に高いと言えるだろう。

『六書故』一九梟の記述に戻ると、前述の節の後、「然ルニ爾雅又伯勞ヲ以テ賜ト為ス(然爾雅又以伯勞為賜)」に始まって伯勞の説明が続いていく。このように『六書故』の梟の記述は明らかに伯勞と梟を混同しており、注目すべき資料といえる。

元代のもう一つの資料、『風雅翼』(劉履撰、十二卷)にも似た様な記述がある。『風雅翼』一〇に、

博勞、伯勞ナリ。一名ハ梟、能ク鳥ヲ攫ラヒテ食フ。巢ニ寄り子ヲ生ム。長ズレバ則チ其ノ母ヲ食ス

(博勞、伯勞也。一名梟、能攫鳥而食。寄巢生子。長則食其母)という記述がある。ここでも伯勞と梟が同一視されているだけでなく、伯勞が「巢ニ寄り子ヲ生ム、長ズルニ則チ其ノ母ヲ食ス」と托卵を行う鳥と考えられているのが分かる。

さらに、『新安文獻志』(明、程敏政撰、百卷)には、その巻五〇に元代の趙汴「伯勞嘆」という詩が引かれている。

伯勞ハ母ヲ食シ母ハ育テズ。子ヲ他巢ニ生ミ、其ノ毒ヲ遠ザク。生マルモ養ハルル悲シミヲ免レズ

(伯勞食母母不育。生子他巢遠其毒。所生不免所養悲。)

この詩では最初の行でまず、伯勞が子は母を食い、母はそれを育て

ないということを示す。母が子を育てないのは、次の行で、他の巢に自分の子を生むことで自らは子供からの害を避けるためであることが述べられている。最後の行は非常に詩的な表現だが、産んでもらったにもかかわらず、育てられることのない悲しみを免れない、ということを表している。

この詩では伯勞が自分の母を食うがゆえに、母親はその害を避けるために他の巢に自分の卵を生むと述べている。ここでもまた伯勞は母を食う鳥というだけでなく、托卵がその母を食べるという習性と同様に示されている。

明代において『通雅』や『本草綱目』のような、その後に影響のある書物に『遯斎閑覽』の記述が引かれているだけでなく、元代の『六書故』や『風雅翼』、『新安文獻志』に残る「伯勞嘆」の詩の様なものにも「鵲」と「梟」を同一視する記述が散見できることは、中国において両者を同一視する考えが、『兼名苑』の記述が正確とするならば唐代から、遅くとも宋代からは一貫して続いていたと考えることができるのではないだろうか。

その後の清代の資料は主に明代の記述をそのまま引いているものが多い。『詩伝名物集覽』（陳大章撰。十二卷、康熙年代の成立か）ではその巻二に、

鄭志道云ハク、伯勞母ヲ食ス。代代相成ス。此レ則チ遯斎、鵲ヲ謂ヒテ梟ト為二因ル、而シテ譌ナリ。伯勞ノ冤ナルヤ。

(鄭志道云、伯勞食母。代代相成。此則因遯斎謂鵲為梟、而譌。

伯勞、冤哉。)

とある。ここでは『遯斎閑覽』についての記述が省かれていること、「古今諺」の語も省かれていること、「鄭志道論俗編」も「鄭志道」と省略されていることなど、引用がかなり怪しいものと考えられることもできる。また、『遯斎閑覽』の記述が無いにも関わらず「此レ則チ遯斎ニ、鵲ヲ謂ヒテ梟ト為二因ル」としている点も、引用が明示されている書物に因らず、かなり不正確な形で行われた可能性が考えられる。加えて他の文献にはない「而譌」が加えられていることも注意すべき点である。

『詩伝名物集覽』に対して、『格致鏡原』（清、陳元龍撰、百卷、康熙丁亥く戊子く1707く1708頃成立）の巻七九に見られる記述は、

陳正敏遯斎閑覽、鵲ヲ謂ヒテ梟ト為スト。

(陳正敏遯斎閑覽、謂鵲為梟。)

という記述と、

古今諺鄭志道論俗編云ク、伯勞母ヲ食フ。代代相成ス。此則チ遯斎、鵲ヲ謂ヒテ梟ト為二因ル。伯勞ノ冤ナルヤ。

(古今諺鄭志道論俗編云、伯勞食母。代代相成。此則因遯斎謂鵲為梟。伯勞、冤哉。)

であり、『通雅』や『正字通』の記述とまったく同じであることから、そのどちらかからの引用と考えることができる。

この二つの文献とやや内容が異なるのが『欽定統志』（清、高宗勅撰く嵇璜、劉墉撰く、六百四十卷、乾隆五十年成立）である。『欽定統志』一八〇 昆蟲草木略七には次の記述が見える。

鄭志ニ、梟、或説ニ、即チ今ノ伯勞ナリ。夫レ梟乃チ惡鳥ナリ。

豈ニ以テ伯勞ヲ指ス可ケンヤ。其ノ説モ亦誤レリ。

（鄭志、梟、或説、即今伯勞。夫梟乃惡鳥。豈可以指伯勞。其説亦誤。）

ここで言う「鄭志」とは鄭樵の『通志』のことであり、『通志』の記述「或説、即チ今ノ伯勞也。母ヲ食フ。」のことである。『欽定統通志』では伯勞を梟と同じ惡鳥と見ることを難じており、伯勞と梟を同じと見ることに同意していない。

このように、「鵲・伯勞」と「梟」を同一視するかどうかは清代まで議論が続いていることであつたことがわかる。しかし、それは同時に清代に至るまで両者を同一視する考えが続いていたことを示しているとも考えられる。

最後にこれまで紹介してきた中国における「鵲・伯勞」と「梟」を同一視した資料を引用したと見られる日本の資料を挙げておきたい。

近世の資料、『新語園』（浅井了意、延宝九へ一六八一の序あり）には、『新語園』七・二三「伯勞付伊伯奇」に、

陳正敏力遯齋閑覽ニハ、鵲ヲ云テ梟トス

の記述が見られる。『新語園』のこの項には伯奇伝についてだけでなく、伯勞や鵲についての中国の類書からの種々の引用と見られる記述も付されていることから、詩や歴史書についての注釈を載せていた『正字通』のようなものからこの箇所が引用されたのかもしれない。

ただし、『新語園』では『遯齋閑覽』についてはふれているものの、「古今諺」や「鄭志道諭俗編」についてふれていない。これは「古今諺」や「鄭志道諭俗編」について述べられていない資料、例えば清代

の『詩伝名物集覽』などを参照にしたか、もしくは『遯齋閑覽』にはふれながら、「古今諺」や「鄭志道諭俗編」については記載されていない資料を参照にしたためと考えられる。おそらく『新語園』の著者は「古今諺」や「鄭志道諭俗編」について確認できなかったのだろう。

四 結び

ここまでのことをまとめるとおおよそ二つのことが言える。第一に先に黒田が紹介した唐代『兼名苑』の記述から清代の『詩伝名物集覽』や『格致鏡原』といった文献の記述に至るまで、宋、元、明といった時代を積みながら「鵲」と「梟」を同一視する考え方が中国において一貫して続いてきたということである。

もちろん各資料の記述には「鵲」と「梟」を同一視することへの疑問や反論が記述されているものもあるが、そうした記述が清代の資料にまで残るということ自体が、「鵲」と「梟」を同一視する考え方が実際には残っていたと考えられる根拠となるのではないか。実際今回見た資料では、ほとんどが「鵲」と「梟」を同一視することの誤りを示唆しているだけであつた。

第二に「鵲」と「梟」を同一視する考え方のものになっているのが、ともに「食母」という習性にあるということである。この点においてもすでに「梟」の「食母」については黒田の論文にて指摘されている。黒田が挙げている『桓譚新論』や曹植「令禽惡鳥論」、『漢書』「郊祀志」の「祠黄帝用一梟一破鏡」における孟康の注「梟、鳥名ナリ、母ヲ食フ。」を参照すると、梟が母を食うということは事実の是非や理

由の如何にかかわらず、その習性として古くからかなり強く伝えられていたと思われる。対して「鵲」の「食母」については、唐代『兼名苑』を除くと、これまで見てきたようにほぼどの資料も『遯斎閑覽』の記述によつて「鵲」に「食母」の習性があるとしていると考えることができよう。

『兼名苑』や『遯斎閑覽』の記述では「鵲」と「梟」の同一視は、特に議論なく行われていることは留意すべきことだろう。確かに『兼名苑』では『孝子伝』伯奇条が引かれており、『遯斎閑覽』では陳正敏が見たという「食母」の記述がある。しかし、それ以後の類書の記述をみると必ずしもそれらが根拠として伝わっていたのかは明確でない。つまり、「鵲」と「梟」をつなぐ明確な根拠は「食母」を行う、「不幸鳥」であるという一点に尽きると言えるのではないか。

また、元代以降の資料に「鵲」の「食母」の根拠として托卵を挙げた記述が見られるようになる。これらは、おそらく『遯斎閑覽』の陳正敏が見たという「食母」の記述が伝わらなくなったことから、「鵲」の「食母」に対する根拠づけを行うために考えられた議論ではないかと考えられる。ただし、これらの記述をもつて、「鵲」と「梟」の同一視が揺らいできたと言えないだろう。

今回の調査は山田の論文を一つの起点として始まったが、陰陽五行を元にした変化以外にも、同一の習性と認められるものを持つ全く異なる鳥が同一視されてきたということは一つの興味深い発見であったと考える。加えて、「鵲」と「梟」のように、これまでは古典の世界でも、現代と同じように全く違うものと認識されていた動植物が、実

は過去には思っている以上に強い同一視が行われていたことを今回の調査は教えてくれる。これは古典の種々の問題を再考する際に意義のある視点ではないか。本調査の実際の意義と同じように、この点も私は今回明らかになった重要な観点であると考えている。

〔注〕

- (1) 山田純「鵲」という名の天皇」(『日本文学』第五七卷第二号 日本文学協会 二〇〇八年二月)
 - (2) 黒田彰『孝子伝図の研究』(汲古書院、二〇〇七年十一月)
 - (3) 黒田注二、前掲論文、七六四頁～七六六頁。
 - (4) 黒田注二、前掲論文、同右。
 - (5) 黒田「鵲と伯勞」「鵲」という名の天皇」読後―(『日本文学』第五八卷第二号 日本文学協会 二〇〇九年二月)
 - (6) 『大漢和辞典』(大修館書店)では書名を『遯斎閑覽』とし、「范正敏撰」としている。
 - (7) 「梟鏡」は「梟」と「破鏡」という二種類の動物を指す。「破鏡」も「梟」と共に不孝の動物とされた。『漢書』郊祀志五上に「祠黄帝、用一梟破鏡」とあり、孟康の注に「梟鳥名。食母。破鏡獸名。食父。」とある。
 - (8) 山田は注一の前掲論文にて次のように示している。まず二頁で『後漢書』卷五十九の張衡伝「鵲鳩鳴而不芳」の李賢注「鵲鳩、鳥名、喻讒人也。広雅曰、鵲鳩、布穀也。」を示して、「鵲鳩」を明らかにする。次に四頁で『文選』卷十五張衡「思玄賦」の李賢注にある「服虔曰「鵲鳩、一名鵲・伯勞、(以下略)」を示し、「鵲鳩」鵲・伯勞」を証明している。この二つから「布穀」鵲鳩「鵲・伯勞」ということが明らかにされている。
- 付言すると、『後漢書』卷五十九の張衡伝の李賢注における引用では、実は「鵲鳩」が「鵲鳩」であることが、黒田注二の前掲論文で示されている(三頁)。この引き違いの重大さについては黒田によつて明

らかにされているが、詳述は黒田の論文に譲りたい。

- (9) 黒田注二、前掲論文、七六〇頁〜七六三頁。特に『桓譚新論』（『太平御覧』九二七所引）や『令禽惡鳥論』（『芸文類聚』所引）が引かれていることは重要である。

（たにぐち しんじ） 文学研究科国文学専攻博士後期課程）

（指導・黒田 彰 教授）

二〇〇九年九月二十八日受理